

薬学部総合系ゼミナールにおけるボランティア活動について

土屋明美 大野尚仁

【目的】東京薬科大学薬学部では、2011年度後期開講の総合系ゼミナールにおいて2,3年生を対象とする「ボランティア活動の理論と実際」を開講し、2013年現在まで前期・後期合せて5回実施している（協力 学生支援委員会）。これは、同年に発生した東日本大震災を被災した日本において、同時代を生きる学生が、被災地に限らず地域貢献活動により学びを深めることを目的として開講したものである。

本稿の第Ⅰ部では3年間にわたるボランティア活動の実態を明らかにして、学生の参加動機について考察する。第Ⅱ部では、学生による自己評価の方法について検討する。

第Ⅰ部

1. ゼミナールについて

優れた医療人となるためには、必修科目で学ぶ基本的な知識と技能、さらには態度に加え、社会における多様な課題や見解について知識を広げ、見識をもって行動することが望まれる。ゼミナールは少人数クラス単位で実施する選択科目であり、演習、グループワーク、プレゼンテーション、SGDなどの能動的な学習方法により、技能や態度を醸成する。

対象学年と内容は次のとおりである。

＜対象学年＞ 1年次後期から3年次にかけて、5種類のゼミナールを選択する。

＜内容＞

1年次後期、2年次前期：物理系、化学系、生物系、総合

2年次後期：化学系、薬・疾病系、創薬、総合

3年次前期：薬・疾病系、創薬、健康・環境、総合

2. ゼミナール＜ボランティア活動の基本と実際＞の実施手続き

＜対象学年＞対人援助についての基本的な関わり、人への見方などを学んだ後に体験することでボランティア先の対象者への配慮をすることができ、また、体験内容の理解に深まりが生じると仮定し、対象学年は2年生以上とする。（薬学部1年生は後期に薬学入門演習Ⅱにおいて、高齢者体験、車椅子介助を体験学習しており対人援助に関する基本的資質は養成されている。）

＜概要＞ボランティア活動を始めるに際しての重要な要素として、自発性・無償性・利他性・先駆性をあげることができる。特に他の人に役立つあり方である「利他性（愛他性）altruism」をボランティア活動により体得することは、医療人としての人間性を豊かにすることに役立つ。このゼミナールでは、ボランティアの基本を学び、ボランティア活動を体験する。ボランティア実施後には全参加者と体験を共有し、ボランティア継続の手がかりを見出し、いつでも・どこでも・だれとでも実行できるボランティアの可能性について討論する。

＜実施時期＞基本的に、春休みと夏休みとする。

＜ゼミナール実施の手続き＞ ①特別ガイダンス実施（ボランティア活動先を見つける必要があり、通常のゼミナールガイダンスに先だてて行う）

②学生はエントリー後、抽選により受講が決定する。ボランティア先は各自で探し、必要に応じて教員に相談し、報告する。実施場所は被災地と高齢者福祉施設、障がい児・者施設、病院、運営母体の明らかな各種ボランティア団体の活動など、ボランティア活動証明書の発行が可能な団体とする。対象者はいわゆる社会的弱者とし、夏休みの子どもキャンプの付き添いなどは含まれない。地域の社会福祉協議会からの情報、学生サポートセンター前の掲示なども参考にする。

③プレ講義（ボランティアの基本、対象者理解について）

④ボランティア実施 実施後体験レポートを提出する。

⑤ポスト講義（pp資料作成、体験報告会）

3. 自己評価について

プレ講義においては事前アンケートを行い参加への構えを成立させる。さらにポスト講義において事後アンケートを行いボランティア体験により学んだことを認識的に整理する。アンケート¹⁾の構成は次のとおりである。

ボランティア体験事前アンケート 2・3年 氏名

質問1 あなたがボランティアをする動機はなんですか。次の項目の中からあなたの動機の強い項目から順に番号を1, 2, 3, 4, 5とつけてください。

- 1 困っている人の手助けがしたいから
- 2 地域や社会をよりよくしたいから
- 3 社会の不正や矛盾に怒りを感じるから
- 4 社会の問題解決に知識・技術・学問を役立てたい
- 5 新しい人と出会いたいから
- 6 自分の経験や技術などを生かしたいから
- 7 新しく感動できる体験がしたいから
- 8 自分のやりたいことを発見したいから
- 9 授業や仕事として位置づけられているから
- 10 大学や職場で活動を奨励しているから
- 11 単位取得や資格取得のために必要だから
- 12 進学・就職・昇進に有利だから
- 13 自分自身を見失っているような不安や喪失感から
- 14 自分自身の生き方に自信が持てないから
- 15 不安な気持ちや傷ついた心を癒したいから
- 16 人とのコミュニケーションや集団での生活に自信が持てないから

（以下の質問は自由記述とする）

質問2 今までボランティアをしたことはありますか？ したことがある人は、いつ、何をしたかをご記入

ください。【質問3】 今回のボランティアでどのような体験をしたいと思いますか。

【質問4】 ボランティアを行うにあたって、大切にしたい考え方や・行動はどういうことですか。

【質問5】 ボランティア活動が単位認定されることについて、どのように思いますか。

ボランティア体験事後アンケート

【質問1】 あなたがボランティアをした動機はなんですか。次の項目の中から動機の強い項目から順に四角の中に1から5まで番号をつけてください。(質問項目は事前アンケートと同じ)

【質問2】 あなたの動機はボランティアをして、どの程度達成されましたか? 十分に達成されたを10として数字で表してください。【質問3】 ボランティアを行うにあたって、大切にしたい考え方や・行動はどういうこと

ですか。【質問4】 次にボランティアの機会があったらどのようなことをしたいと思いますか。【質問5】 今後ボランティアをする予定がありますか。【質問6】 ボランティア活動が単位認定の条件になっているについて、どのように思いますか?

3. 結果

【結果1】 受講人数

○ボランティア期間・受講人数

第1回 2011年夏休み (28人) 第2回 2012年春休み (29人)

第3回 2012年夏休み (27人) 第4回 2013年春休み (27人)

第5回 2013年夏休み (15人) 総計 126人

○ボランティア先毎の人数・割合 (%)

東日本大震災被災地・被災地関連 64人 (51%) 高齢者関連施設 24人 (19%)

病院 12人 (9%) 障がい児・者関連施設 10人 (8%) 地域NPO,他 16人 (13%)

表1 ボランティア先内訳人数の経年変化・総計割合

時期/ボラ ンティア先	2011 夏	2012 春	2012 夏	2013 春	2013 夏	合計 (%)
被災地・関連	14	15	10	16	9	64 (51)
高齢者施設	4	6	7	6	1	24 (19)
障がい・福祉	4	5	1	0	0	10 (8)
病院	1	1	8	0	2	12 (9)
地域NPO 他	5	2	1	5	3	16 (13)
合計(人)	28	29	27	27	15	126人

【結果2】 アンケートから

質問1 「あなたがボランティアをする動機はなんですか。次の項目 (16項目) からあなたの動機の強い項目から順に番号を1,2,3,4,5 とつけてください」

集計にあたっては、設問1～4 (1困っている人の手助けがしたい。2地域や社会をよくしたい。3社会の不正や矛盾に怒りを感じる。4社会の問題解決に知識・技術・学問を役立てたい。) を分類I 「社会への問題意識」、設問5～8 (5新しい人と出会いたい。6経験や技術などを生かしたい。7新しく感動できる体験がしたい。8自分のやりたい事を

発見したい)を分類Ⅱ「出会い」

設問9～12(9授業や仕事として位置づけられているから。10活動を奨励しているから。11単位取得・資格取得のために必要。12進学・就職に有利。)を分類Ⅲ「修学」

設問13～16(13不安や喪失感から。14生き方に自信が持てない。15不安な気持ちや傷ついた心を癒したい。16人とのコミュニケーションや集団の生活に自信が持てないから。)を分類Ⅳ「生き方」とする。

【結果2-1】5項目を選択順位に関係なく、上記の4分類に従って総計すると表2のとおりである。

表2 参加動機の4分類

時期／ 分類	2011 夏	2012 春	2012 夏	2013 春	2013 夏	合計 (%)
I 社会	57	63	43	44	26	233人 (38%)
II 出会	61	57	57	41	27	243人 (40%)
III 修学	10	16	18	25	8	77人 (13%)
IV 生き 方	14	9	6	14	9	52人 (9%)

【結果2-2】 分類Ⅰ「社会への問題意識」の内訳割合

- 1 困っている人の手助けがしたいから 10%
- 2 地域や社会をよりよくしたいから 20%
- 3 社会の不正や矛盾に怒りを感じるから 30%
- 4 社会の問題解決に知識・技術・学問を役立てたい 40%

【結果2-3】 分類Ⅱ「出会い」の内訳割合

- 5 新しい人と出会いたいから 19%
- 6 自分の経験や技術などを生かしたいから 23%
- 7 新しく感動できる体験がしたいから 27%
- 8 自分のやりたいことを発見したいから 31%

【結果2-4】 第1選択質問項目

- 1 困っている人の手助けがしたいから 42%
- 2 地域や社会をよりよくしたいから 11%
- 7 新しく感動できる体験がしたいから 11%
- その他 36%

【考 察】設問 1（困っている人の手助けがしたいから）は、第 I 選択肢としては半数近く（42%）から選択されているが、分類 I 「社会への問題意識」内では 10%であり、設問 4（社会の問題解決に知識・技術・学問を役立てたい）が 40%を占めている。また分類 II 「出会い」では設問 8（自分のやりたいことを発見したいから）が 3 分の 1 を占めている。これらより薬学生はボランティアを手がかりにして専門的自律性を獲得しようとしていることが推察される。出会いを求めて学外に出ることにより自らの方向性への確信を育てることにつながっている。ゼミ終了後も病院や施設でのボランティアを継続したり、ゼミ修了生が集まりボランティア団体を組織化する動きも現れ、本ゼミをきっかけとして愛他性と自律性を発揮しようとする態度を認めることができる。生き方を問う学生もおり青年期の特徴も配慮して指導することが必須である。自由記述には、ボランティアの単位化にはおおむね賛成であるが対象者からどのように思われるかについての心配も表わされている。ボランティアへの関心はあったが行動に起こせなかったのも、よいきっかけになったと捉える学生が殆どである。ポスト講義において「薬学生として今・考えること」へと課題をつなげることで、ボランティアが特別な事ではなく生活全てにつながっている事、また、今・学んでいる事が世の中の人々に役立っていることの自覚に、また今を生きる生活者としての意識確立に役立っていると考えられる。一方、参加者数は 2013 年夏には激減している。大震災直後のエントリー者は募集人数をはるかに上回っていたことを考えると、「何かしなければ」という社会的雰囲気は静まりつつあるということ、また、学生のボランティア団体が組織化されて低学年の学生が自発的に動き出したことなどが影響していると考えられる。また、自発性の必要とされる学外活動には躊躇し、ゼミナールには他の学びを求めていることも想像される。学生による体験レポートは、被災地や福祉問題に関する現代の日本の諸問題を映し出す貴重な資料にもなろう。薬学生は 6 年間で様々なことを学ぶが、知識の習得に多くの時間を費やしている。新薬開発は多くの患者を救うので、医療をマクロに捉えた中での社会への貢献として目的が明確化されやすいし、教員にとっても最新の知識を学生に伝えることは最も得意とする領域であり、伝えることの意義を明確化しやすい。知識の量を評価する方法は、定期試験の中で定着しており、教員も学生も、そのことに疑問を抱くことはない。一方で、医療人としての態度の学びは、中核には 5 年次の長期実務実習があり、薬剤師の卵として、患者に対応するチャンスを得ることから、プロフェッショナルとしての意識改革がなされる。しかし、低学年時には、そのチャンスは少ない。1 年次には、車いす体験、高齢者体験等を通じて、入門編は行われるが、5 年次に至る過程で段階的に成長を促すことについてはプログラムの改善が必要であると感じている。ボランティアゼミナールは、人として、医療人として如何に社会とつながるかを学ぶ貴重なチャンスを学生に与えている。薬学部のプログラムは殆どが必修科目化されており、学生自らが考えるチャンスが少ない。このことは学生が受動的にならざるを得ない状況を作り出している。受動的な状況にあっても、ボランティア活動のチャンスを多く与えることができるよう、ゼミナール本来の目的に立ち返り、より魅力ある運営を学生と共に模索していきたい。

第 II 部 体験学習における評価について

第 I 部で紹介したように体験中心の学びにおいては、学生が体験をどのように自分のものとするかに関する評価方法の工夫が必要となる。第 II 部では、第 5 回目（2013 年夏）に行った方法を提示し、新たな評価方法を見出す一助としたい。

1. 事前学習

1) 講義内容 ①ボランティアとは何か—ボランティアの誕生、ボランティアの活動の理念、目覚め・分かち合い・共同するための学びへ、ボランティアと学びの構造

②対象者理解・関わる際の留意事項について—学生震災ボランティアの心得 11カ条、子どもとかかわる7カ条、高齢者とかかわる7カ条、気持ちや感情を表現することの苦手な方、人間関係の持ち方の苦手な方とかかわる7カ条

2) SGD

テーマ①ボランティアはすること？ させていただくこと？（例：自主的にすること、良かれと思っ
てすること。普段できないことをさせていただく。両方を満たす。ほか）

テーマ②ボランティア活動で学びたいことは？（例：求められていることをするだけではなく行動し
たい。自分のすべきことに気づける力を養いたい。相手の気持ちを察してできるようになりたい。困
っていることを知る。被災地の方にとって必要なこと。発達障がいの子どものかかわり。将来薬剤師に
なった時に高齢者とどう接するか。ほか）

テーマ③心配な事・不安なこと（自分が役に立つのか、逆に迷惑をかけないか。仕事ができるか不安。
言葉かけに注意する。足手まといになるのではないか不安になる。ほか）

2. 事後学習

1) ボランティア体験後およそ1ヶ月後にレポートを提出する。

課題1：活動内容（どのような団体で、どのような活動をしたかを記載する）

課題2：印象的な出会い、出来事について（自分が感じたこと、出会った人との体験などを自分の視点
から整理することで体験の自己化を促すことを目的とする。）

課題3：薬学生として考えたこと（薬学生の観点から整理することで社会事象への関心、薬学生として
の社会貢献のあり方、社会において期待される薬剤師の役割、社会貢献などについての問題意識を成立
させることを目的とする）

課題4：今後の課題（残された課題など、将来への見通しを成立させる）

2) 体験発表会へ向けてのスライド作成

スライド内容は次の5項目から構成する。

1. ボランティア先に関する資料 2. ボランティア体験内容 3. ボランティア体験から学んだこと
4. 考察 5. 2013年11月 今・思うこと（1（自由記述）。2（自由記述）。3薬学生として。） 体
験発表会はボランティア後、3, 4か月後であり体験も薄れてきており、単なる報告会では得ることも少
なくなる。そこで、「今・思うこと」を取り入れ、ボランティア活動により学んだことを日々の学びに
連動させることへの意識化を促す。

3. アンケートの実施

事前アンケートでは参加動機を16項目から動機の強い順に5つ選択し、事後アンケートでも同じ項
目について同様にして選択した。さらに各設問について「どの程度達成されたか」について10点満点
で評価した。その結果、事前・事後アンケートで選択した5項目の内、一致した項目は、一人2~5項目

で、平均 3.3 となり、ボランティア活動への参加態度にはほぼ一貫性を認めることができた。また、達成感については 15 人中 6 人が「新しく感動できる体験がしたいから」に 10~9 点評価をつけている。達成感の主観的な評価であり、学生が何を基準にして評価しているかは客観的には捉えられない。しかし、学生自身が自己評価の手がかりとして何を基準にするかを定位することは可能である。自分の選択した参加動機の高い項目に関しての達成感の変動を自己評価の手がかりとするなど、今後の自己評価方法に適用可能と考えられる。充実・発展しつつある自己への評価法とも言える。

4. 体験発表会

一人 10 分の持ち時間では足りないほど熱心に、体験直後のレポート内容を超える深い考察をして発表に臨んでいた。発表会に留めることが残念であり、他の人にも知っていただきたいと感じる発表ばかりであり、また、ボランティア先が多岐にわたるため、お互いにとって意味ある共有の時間となった。発表会終了後のやり取りの中で、公表に快諾いただいた 3 年生 4 人グループの発表のほんの一部をここに転載させていただき、雰囲気の一部を味わっていただきたいと思う。

4 人は夏休みの 3 日間、復興支援ボランティアバスで、夜、品川を出発し、震災遺構に立ち寄りながら南三陸町でボランティア体験をしてきた。

「今自分にできることは何かを考えました。まず、ボランティアで体験したこと、学んだこと、感じたことを家族や友人に伝えるということです。ボランティアに参加したことのない人は、ボランティアがどのようなものかわからないため参加する勇気が持てないという人も多くいると思います。体験を伝えることで、参加したくても一歩踏み出すことのできなかつた人の背中を押すことができるのではないのでしょうか。次に、自分自身が再びボランティアに参加することです。ボランティアに参加するまでは、自分が行っても役に立たないのではないかという不安もありましたが、今回参加して、自分のできることをすれば良いということがわかりました。多くのことを学び・考えることができたので、自分自身にとっても有意義な体験ができました。また、災害への備えをすることも重要であると考えました。」

「2013 年 11 月今・思うこと一被災地に行き、壊れた建物を見た時の衝撃は、テレビなどで見るものよりもはるかに大きかったです。今回の経験を無駄にせず、また忘れないようにするためにも多くの人に話すことが大切だと思いました。私はいまでも幸せな環境にいると思います。テストが大変であったり、嫌なことがあったりして逃げ出したいことがあります。大切な人が当たり前のように周りにいて、普通に生活できることがとても幸せなことであると思いました。被災地で薬剤師は不足しているようです。そのような時に、現場に行き、知識がなく役立たないなどということのないように、日頃から勉強をしていきたいと思いました」

「学んだこと一会話の難しさ、地震の被害に対する情報の疎さや人とのつながりです。

会話の難しさは、私はシャイなので話のきっかけがないと会話を始められないという点があること、会話している中で地震の悲劇を思い出させるようなことを言うのではないかという不安がありました。普段、社会の情報に疎いので今回の体験で一般の人が知っていても自分の知らないことが沢山あるのだとあらためて実感しました。日本人として同じ日本に起こっていることを知らないことは恥ずかしいことだなと思いました。人との繋がりが一私はよく友達とバスツアーに行くのですが周囲の知らない人たちと仲良くなったことは一度もありません。しかし、今回のボランティアでは皆で一緒に頑張っ

た事が同じ目的であったことから、一団となって直ぐに仲間意識が湧いて仲良くなれたのだと思います。将来医療現場でもそのようになればいいなと思っています。」

「被災地ボランティアでは、とりまとめているスタッフはもちろんですが、参加している人たちの意識は高いと感じました。しかし、社会全体からみるとまだそれほどでもなく、地元の仲間でも被災地に行った人はわずかでした。そして、何かの折に私がボランティアに参加したと話せば『わー！すごい』になってしまうのですが、何か違う気がします。また、運営に関しては資金が必要です。が、寄付が当たり前のアメリカ（企業や資産家）などと違って、日本にはこの点が不足していると言われていましたし、私もそう思います。『ボランティアが特別なことではなくてどこにでもあること』になっていき社会全体のボランティアに対する意識が変わることを願っています。」

付記 第I部は、第32回日本社会薬学会における発表「薬学生の社会貢献活動に関する考察」土屋明美・大野尚仁 を再構成し、加筆、考察したものである。

引用・参考文献

1) 興梠寛 私が変わる、会社は変わる 平成19年度学生ボランティア活動支援・促進の集い 総合資料より

長坂俊成 記憶と記録 311まるごとアーカイブ 岩波書店 2012